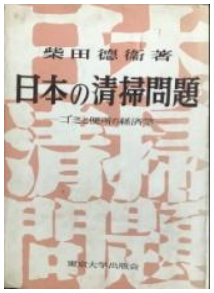
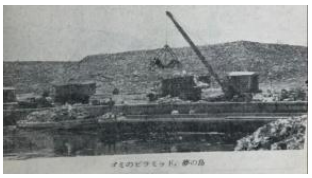
日本の清掃問題―東京「夢の島」

写真は柴田徳衛『日本の清掃問題―ゴミと便所の経済学』東京大学出版会、1961 年。「ゴミのピラミッド、夢の島」について紹介しよう。



東京都の 23 区内で、都清掃局が処理しているゴミだけで昭和 36 年度は 1 日平均 5 千トン近く(厳密には 4925 トン)で、1 年間には 200 万トンにも近づこうという大変な分量である。東京駅前丸ビル一ぱいのゴミの山が、年間 20 から 25 ほどできる計算である。文字通り「塵もつもれば山となる」わけだ。問題はこれがどう処分されているかである。36 年度についてみると、トラックに積まれた後、その主力 8 割は船などで東京湾口の海面埋立てに用いられ、残り 15%(700 トン余)が焼却処分、4%が農村へ家畜飼料としてむけられたりしている。



この主力とたのむ海面埋立てが、これまで 33 年間にわたり利用してきた深川の 8 号地はほぼ一ぱいとなり、現在はもっぱらそこから船で 15 分ほどいった島―「夢の島」の埋立てにむけられている。夢の島と聞けばロマンチックに響くし、遠くからみれば平坦な島にすぎないが、近づくとなるほど壮観である。平均高さ 12 ㍍の梯形に盛りあげられたゴミの山が幾つも 3 万坪以上にわたりならんでいる。そこへさらに、華やかなりし市民生活の夢の跡が、毎日層一層と積みあげられていく。ワッと飛び上るハエの群の下をよく見ると、人形の首・下駄の鼻緒から古畳・破れ障子……と無数にころがっている。まことに、ここで働く人たちが「夢の島デパート」と呼ぶだけのことはある。ここへは毎日 4、50 トンから 100 トン位のゴミを満載した船が入り、起重機ですくいあげられ、トラックでどんどん島の先の方へ棄てられていく。

問題は、この埋立てがいつまでもつづけられないことである。かつて昭和 32 年度を初年度として首都圏整備計画がたてられ、それによって遠大なる清掃十カ年計画もつくられた。ところが、幸か不幸か東京の発展ぶりはあらゆる予想をこえてしまい、右の計画量を現実はすっかりのりこえてしまった。

ゴミ処理の正道として焼却場利用があるが、現在その新たな設置は地元の反対が強くてなかなかうまくはかどらず、主力をこうして埋立てにたよらざるをえない状況にある。

久しぶりに『日本の清掃問題』を手にしたのは、先日たまたま、東京江東区の住民が無数のハエに悩まされ、東京都が「夢の島」焼却作戦を敢行した映像を視聴したからだ。いま大阪の地では、「夢洲」なる軟弱地盤の埋立て地での万博、IR カジノをめぐり揺れ動いている。なんだか「夢」のような話だ。

(2022年8月7日)